久美浜本願寺阿弥陀如来立像について

――三尺阿弥陀像への視点――

伊東史朗

一　本願寺阿弥陀如来像

京都府の北部、久美浜町にある本願寺（浄土宗）の本尊阿弥陀如来立像は、建築史の側から鎌倉時代後半建立と鑑せられる阿弥陀堂に祀られ、また別に、本像についての正安元年（一二九九）の文書が伝えられるなど、安置状況や造立事情に関して考える手懸りが少なくない。

この阿弥陀堂（挿図1）は南面する方五間（桁行七・九四m×梁行八・三八m）の建物で、内陣後方にある須弥壇上の厨子に、本阿弥陀像が観音・勢至像とともに納められている。両脇待像と三尊の光背・台座、および厨子はいずれも後補なので、当初は阿弥陀だけの独尊像だったかともいえようが、今のような構成でも窮屈な広さでは決してない。

正安元年の文書（挿図2）は次のようである。[1]

挿図1　阿弥陀堂　本願寺

□　後□伊賀御房（局カ）所被
寄進□守□親季□
前司□□寿二年（□□三年三月十三日御崩御）　奉為
後白河院五七日御追善被造立之
法然上人四十八度所被供養之仏
像也就之六口僧衆等長日不断之
称名二季不断念仏毎月○十五日廿五（十三日百万辺念仏）
三昧毎日二時礼讃光明真言等○勤行（併上為現当二世御祈禱）
無懈怠者也仍注進言上如件
正安元年十月日　　僧教上
僧楽智
僧寂意
僧光意
僧□阿
院主□阿（上）

行間に書きこみが多いので、正文ではなく案文と判ぜられ、内容からいうと「本願寺僧等注進状案」と題せられる文書である。最初の三行に判読不能の部分が多いため、「伊賀御房（局カ）」の寄進したのが何か不明である。また「□寿二年」の傍に記された「□□三年三月十三日」云々は、後白河法皇の崩御した建久三年の年月日のことで、そうであれば「□寿二年」は単なる間違いかまたは別の意味をもつのか、理解に苦しむところでもある。

後半の文意は、本像が後白河法皇の五七日追善のために造立され、

挿図2　本願寺文書　本願寺

法然が供養したものであること、「六口僧衆等」（末尾に列記された六人の僧のことか）が長日不断称名、二季不断念仏などを懈怠なく修すべきことについてである。

法然が法皇崩御や遠忌仏事にかかわっていたことは『法然上人絵伝』に記されているところからも推定されるのだが、久美浜下向をいう史料は近世の文献[2]まで待たなければならないので、これを直接裏付けることはできない。従ってそのことはしばらく措くとして、彫刻史の上から注目すべきは、本像が後白河法皇の五七日追善仏だという一点である。

それでは本像についての記述に入ろう。

像高九七・九cm、髪際高九〇・六cmの、いわゆる三尺の阿弥陀如来立像である。下半身に裳を着した上に、左肩から袈裟を偏袒右肩に着し、さらに右肩にその一部を少し懸ける。右手を屈臂し、左手は体側に沿って垂下させ、それぞれの第一・二指を捻ずるいわゆる来迎印とする。左足を半歩踏み出して、蓮華座（踏み割り式。後補）の上に立つ。

ヒノキ材。頭頂から見て両耳後ろ、また像底から見て両足踵後ろの位置に矧ぎ目があり、頭・体の根幹部はここで前後に矧がれるものと推定される。踏み出された左足の動きに合わせて、当然のことながらその辺の裳裾も前に出ているので、像底の矧ぎ目もまた左方が前寄りとなって横一直線ではない（挿図3）。わずかな体の動きに合わせた材の寄せ方からすると、その木寄せ法は割り矧ぎでなく、あらかじめ矧ぎ目が想定できる二材矧ぎ寄せかと推測される。肉髻上半は別材（横木。後補）を矧ぎ、頭・体は頸部三道下で接合する。両手部はそれぞれの肩で矧ぎ、左手は肩―袖下まで一材で、これに手首先を矧ぎ、右手は臂と手首で矧ぐ。また両足先を矧ぐ。両足枘は足先部・足踵部と共木彫出。漆錆下地、漆箔仕上げ（像底〈足枘を除く〉にも漆箔は及ぶ）。彫眼とする。全体に内刳りを入れるが、像の大きさに比して少し重く感じられるのは、刳りの少ないせいか。全体に後補や欠失部分がわずかで[3]、当初の像容をよく留めているといえよう。

像は充分な量感と潑溂とした肉身の張りをもち、現実的な表現がていどの差はあれあらゆる層の仏師に滲透した十二世紀末の感覚をよく示している。しかしこの頃の快慶初期の三尺像からすればなお重厚で、彼に見られる軽快さはない。表面の漆箔が後補とはいえ当初からこの仕上げだったと推定され、快慶造像に多い金泥仕上げとは自ずから異なった雰囲気をもつ。体奥が深く、また股間のY字型

挿図3　像底　阿弥陀如来像　本願寺

衣文はやや太めという、一木彫像に倣ったような古様な表現は、奈良仏師（慶派）のそれとは確かに異質で、他方円派のつくりからもさらに遠い。とすれば別の系統の仏師を想定しなくてはなるまい。

そこで、院尊周辺の院派仏師の製作が考えられる長講堂勢至菩薩像（挿図4）と比較すると、大振りながら引き締った面相部、丸みを帯びた衣文などのつくりに、本像との共通点が見出せる。このことから考えて、同派の仏師が最有力候補となろう。従って本像は、院派仏師による十二世紀末期の製作が推定され、さらにいえば、建久三年（一一九二）後白河法皇崩後の追善仏という可能性は、像本体に徴する限り、強いとしなければならない。

挿図4　勢至菩薩像　長講堂

二　後白河法皇追善と造仏

建久三年三月十三日の後白河法皇の崩御の後で、初七日に当る十九日に御誦経のことがあり、次いで使が常住寺・仁和寺・東寺・西寺・延暦寺・法勝寺・蓮華王院に立てられた。さらにこれに続いて二七日から七々日の間にも仏事が修され、使が京中や奈良の大寺に発せられたのであった（『師守記』）。このような七日毎の法事のほか、四十九日までのほとんど毎日のように仏事が続けられた。樋口定能の日記『心記』[4]（『定能卿記』とも）には、この間毎日の追善仏事のことが詳細に記されている。『明月記』のこの間の記事に比べると記入されない日が少々あるものの、仏事の願主だけでなく一々の作善の内容にまで言い及んでいる点が、貴重である。

この日記からここで必要な事項を書き出したのが次の表である。実に多くの人たちがこれにかかわっていたことが判る。作善の内容はほとんどが仏像（彫像または絵像）と写経の供養であり、一部には仏像だけの場合もある。彫像に注目しよう。尊名から見れば、当然予想されることながら阿弥陀像が断然他に抽ん出ている（独尊十五例、三尊十例）。尊名にかかわらず全体を大きさで分けると、三尺像が圧倒的に多く（二十三例）、次いで等身像となる（十六例。以上いずれも四月十三日の「三尺迎講」を除いた数）。このほか半丈六と一搩手半が各一例ずつあるのは特殊なケースというべきだろう。理由は不明ながら、忌明け近くの四月二十九日から急に等身像が増えてくるのは興味深い現象である。

さてこのような中で最も造例の多い三尺阿弥陀像に関連して、四

後白河法皇追善の仏事

	願主	作善の内容
四月十二日	法勝寺執行法印章玄	仏突立障子（阿弥陀三尊を図す）、経一部、最勝王経一部
十三日	大膳大夫業忠	三尺阿弥陀、色紙経十二部、金光明経
	右少将忠行	三尺阿弥陀、法華経六部、金光明経
	中将親能	三尺阿弥陀三尊、経六部
	右衛門督隆房	三尺迎講
十八日	右府	半丈六、金泥一部、素紙十一部
十九日	馬助元忠	三尺阿弥陀、経十二部
	別当	絵像阿弥陀曼多羅
	為保入道	三尺阿弥陀、経十二部
廿日	新少将教成	三尺虚空蔵、経十二部
	光遠入道	三尺阿弥陀三尊、金泥一部、素紙十一部
	清成	三尺救世観音、経十二部
	殿富門院	等身釈迦三尊、金泥一部、素紙十二部、金泥阿弥陀経一巻
廿一日	範綱入道	三尺阿弥陀三尊、金泥一部、素紙十一部
	御室（守覚法親王）	三尺弥陀三尊、金泥一部
	宣陽門院	三尺阿弥陀三尊、二部（五イ）大乗経、金泥法華経一部
廿二日	広隆寺宮法印	三尺阿弥陀三尊
	右京大夫季能卿	厨子内一揲手半普賢・薬王・薬上、経十二部、金泥一部、冊花厳
	前大貳範能卿	等身弥陀、経十二部、金泥一部
	仲遠	三尺弥陀
	成季	三尺弥陀
廿三日	予	等身阿弥陀、金泥法華経一部、素紙十一部、誦経物三百
	天王寺宮（定恵法親王）	等身阿弥陀、経金泥一部、素紙十二部
廿四日	平中納言親宗	等身地蔵、金泥一部、素紙六部、地蔵本願経一部
	能蓮	三尺阿弥陀、法花経二部
	刑部少輔仲国	三尺弥陀三尊、金泥一部、素紙
廿五日	双林寺宮（阿夜御前）	法花曼多羅
	右大将	等身阿弥陀三尊、金泥一部、素紙十一部、金泥宝筐印多羅尼
	法眼最舜	三尺阿弥陀、経三部
廿六日	宰相中将成経	三尺地蔵（後に障子あり）、経十二部
	公朝入道	三尺大日、経
	聖護院宮（聖恵法親王）	三尺弥陀三尊、金泥一部、素紙十二部
廿七日	法橋宗円	絵像普賢十羅刹、経三部
	定康入道	三尺阿弥陀、経十二部
	左衛門督	千手等身
廿八日	民部卿経房	等身弥陀、金泥一部、素紙十一部、誦経物百
廿九日	修理大夫定輔	三尺普賢、経六部
	仁和寺宮（守覚法親王）	等身弥勒、金泥一部、素紙十一部
	前斎院	等身普賢
卅日	前斎院	等身阿弥陀
	按察朝方	等身弥陀、素紙、経十一部（二イ）
	八条院	等身釈迦三尊、金泥一部、五部大乗経
五月 一日	前大将（頼朝）	等身弥陀三尊、紺泥法花経十三部
二日	梶井宮（承仁法親王）	等身釈迦三尊
六月十三日（月忌）	僧正実慶	絵像不動
	斎院（式子内親王）	絵像□□
	最舜	極楽曼多羅
廿四日（満百日）	二品（丹後局）	三尺大日（御体内に仏舎利と故院の御歯を納める）、真言供養
	右府	等身地蔵
	殿富門院	絵像釈迦三尊
七月十三日（月忌）		

月十三日に右衛門督隆房の修した仏事での「三尺迎講」がどのようなものか、注意が惹かれる。迎講とはいうまでもなく阿弥陀の来迎劇であるが、「三尺」と書かれている以上これは仮面を被った菩薩聖衆ではなく、来迎の阿弥陀彫像の謂と推定されよう。実際に迎講が修されたのか、あるいは来迎の阿弥陀像のことをこう言い替えたのかは判らないものの、少なくとも三尺の阿弥陀彫像が置かれたことだけは確かだろう。このことからすれば、数多いほかの阿弥陀像も来迎をあらわすもので、印相もいわゆる来迎印だったと推定して大過ないと考える。追善仏であってみれば、この印相が最もふさわしい。また、この日記には坐像か立像かの区別を記していないけれど、坐像であれば三尺像の像高は等身と記すのがふつうなので、これらは立像とみるべきである。このように、確かに本願寺像と同形同大で、しかも多数の像が、法皇追善仏としてつくられていたことが判る。(5)

本願寺文書に記された五七日は四月十九日に当る。この日に供養された、馬助元忠と為保入道それぞれの所願になる三尺阿弥陀像のいずれかが、本願寺像に該当するかどうかは、決め手となる裏付けを欠いている。しかし本像が来迎印の三尺阿弥陀立像であるという図像上の符合だけでなく、作風からもこの頃の製作とみられるならば、後白河法皇の追善仏という文書の記事を一概に否定し去ることはできないといえよう。(6)

次節で詳しく述べるところだが、鎌倉時代以降にわかに増える来迎印の三尺阿弥陀立像も、平安時代ではそれほど多くない。そのうちで造立事情の推測できるものに地蔵院像(白川金色院伝来　挿図5)がある。四条皇太后寛子(後冷泉天皇の皇后)の発願になる金色院は康和四年(一一〇二)二月十七日に供養されているが(『白河金色院勧進帳』)、これより四日前の十三日、宇治において故藤原師実(寛子の弟)の一周忌法要がいとなまれ、寛子もこれに列席した(『権記』)。これと日を接して供養され、同じ宇治にある金色院は、師実追善の意を籠めての建立であったに違いない。来迎印の三尺立像である地蔵院像が師実の追善のためだったとすれば、この形式の像を追善仏とする前例のひとつとなろう。

挿図5　阿弥陀如来像　地蔵院

三　図像上の問題点

ひるがえって図像上の観点に立って、本願寺像について検討すべき問題の二、三を指摘したい。

(1)　三尺像　三尺ていどの如来立像は古くから存在しているのだが、来迎印を結ぶ阿弥陀立像を三尺とする例となると、正暦五年(九九四)頃の真正極楽寺像(像高一〇八・四cm　挿図6)を現存では最初期の例としうるだろう(ただし両手第一・二指をそれぞれ捻ずるのでなく、右手は第一・二指を捻じ、左手は第一・三指を捻じて第四指を曲げる)。しかしこの像にはさらにその前身となる像があったようで、『真如堂

縁起』（大永四年〈一五二四〉）によれば、円仁が霊木の一片で阿弥陀の坐像（「蓮華部印」と記されるが、定印か）をつくり、さらに唐からの帰航中に現れた阿弥陀の立像の姿を、帰国後残りの一片から彫刻したのが、真正極楽寺の本尊像[7]であるという。後者の造立のくだりを『縁起』は、

さて以前貽（のこし）をかれし片木にて、弥陀立像一刀三礼に彫刻して、彼船中出現の化仏を腹身し給御長三尺三寸九品来迎印

と記し、立像であることのほか、大きさが三尺三寸でかつ来迎印を結ぶことを、ことさら強調している。室町時代という後世の縁起譚である点注意を要するのだが、本尊造立にまつわる話でもあり、真偽はさて措き、かなり古くからの伝承だったことは確かであろう。従って、阿弥陀・来迎印・三尺・立像という四種の図像の組合せは、わが国では円仁の造像をもってその濫觴とすることができ、真正極楽寺の現存像はそのような由縁に基づいての造立であったといえる。そのことは、わが国浄土教史における阿弥陀来迎印の成立期という重要な問題にも関係することになるのだが、少くともこの像とその伝承がそれへの手懸りであることは間違いなかろう。

挿図6　阿弥陀如来像　真正極楽寺

その後十一・十二世紀の平安時代後期において、この形式の阿弥陀像は現存遺例に照らすと、京都・奈良・滋賀などの畿内を中心に数例を数えることができるのだが、その状態には、鎌倉時代以後における浄土宗教団の発展に併って見られる、この像の爆発的な流行への準備段階ともいえ、それだけになお、両者の過渡期に位置し、しかも追善仏とされたことの判る本像の史的意義は大きい。

(2)　覆肩衣のない立像　本願寺像の上半身は袈裟を偏袒右肩に着し、右肩にもそれを少し懸けるだけで、わが国のほとんどの如来形の立像が右肩にまとまっている覆肩衣をあらわさない（覆肩衣は従来偏衫と言い習わされてきたものだが、最近光森正士氏によりこれを僧祇支と改むべきことが提唱されている[8]。ここではとりあえず、説明的な用語で、誤りない覆肩衣という語を用いる）。

如来形像の上半身の服制に着目してその変遷の特徴を述べると、平安―鎌倉時代前半に限られるのだが、まず坐像では、若干の例外を除いてほとんどの像が覆肩衣をしていない。ところがこれとは逆に立像の場合は、覆肩衣をする像の方が一般的なのである。（後者の場合、右肩に袈裟の一部を少し懸けることはない。なおいずれも袈裟を通肩に着す場合を除く）。特に十一世紀以降、この傾向は著しい。飛鳥―奈良時代や鎌倉時代後半以降などでは事情がこれとは若干異なり、また地蔵や一部の弥勒[9]は坐像でも覆肩衣をするという特例があるのだが、時代をこの頃に限りまた一般的な如来の尊像でいうならば、ほとんどがこの原則に従っているといって過言でない。さらに対象をこの時期の阿弥陀立像だけに絞るならば、例外がいっそう少なくなることにも注目すべきである[10]。

覆肩衣はインドや中央・東南アジアの仏像では決して見られず、中国のしかも北魏代になって初めて現われる着衣とされる。[11] まさに極東特有の服制といってよい。その後の中国でも、袈裟を偏袒右肩に着すだけで覆肩衣をしない如来像がないわけではないけれど、覆肩衣のあるなしが立像・坐像と対応関係にあるようなことは、まずないようである。従ってこの独特の現象は、日本である時期に選択されたことの結果であろうとは一応推測されるのだが、そうであってもそれがどのような意味をもつかは、現時点での速断は避けなければならない。

しかし少くとも、本像が以上のようなわが国に顕著な傾向に逆行していることは事実であり、その意味でユニークな存在であることは強調してよいだろう。

(3) **片足を踏み出す像**　本像は左足を少し踏み出していて、前に歩みつつある姿であるかにみられる。菩薩形像によくある三屈のポーズも結果的には片足を前に踏み出すことになるのだが、本像がそれと無関係なことは、腰が左右どちらにも捻られていないことからも明らかで、この足が歩行を表現していることは疑いない。

如来が足を踏み出して歩く姿はすでにベゼクリクなどの壁画にもあり、坐像とはまた異った意味合いで拝されていたことが指摘されており、[12] また中国でも、『妙法蓮華経文句』（智顗または灌頂撰）に「行動仏」は立像につくるべきことが記されている。[13] ところがわが国では、鎌倉時代以降の来迎形阿弥陀立像に片足踏み出しの姿が多いのだが、少し遡って平安時代以前となると、如来形では尊名を問わずほとんど見ることができない。

鎌倉時代になって現われるこの新しい傾向は、阿弥陀来迎図の主尊がこの時代になって立像になるという変化とおそらく関係がある。来迎図は周知のように、平安時代では観想念仏や臨終行儀の対象にふさわしく正面向きの坐像として表現されていたのだが、やがて斜め向き構図のものが現われ、鎌倉時代では阿弥陀が立像とされるに至った。現存最古の立像来迎図とされる清涼寺本（法然が建久六年〈一一九五〉以前に熊谷直実に与えた本とする説[14]がある　挿図7）を始め、滝上寺本・知恩院本・光明寺本など、この時代の立像来迎図の遺品は豊富だが、例外なく片足を前に踏み出す歩行の像である。はるか浄土から往生者を迎えるべく来たのであれば、歩みつつある姿がふさわしいことは、言うまでもなかろう。

本願寺像（建久三年）と清涼寺本（同六年以前）がほぼ同じ頃の製作であり、しかもいずれも法然の関与が伝えられることから考えて、歩行姿の阿弥陀像が、絵画・彫刻を問わず、この頃から始まったとみることもできようが、実は彫刻の場合、もっと古くからあったことが推定できる。すなわち『往生要集』大文第六にある、臨終の行儀として立像の阿弥陀像を用意すべしという指示がまず想起されるが、これとは別に、『阿裟縛抄』第五十三（阿弥陀）は、阿弥陀来迎

挿図7　阿弥陀迎接曼荼羅（副本　部分）　清涼寺

像が立像たるべき根拠を瞻西上人（一一一二七）の説に求め、

迎摂仏可レ為二立像一証文瞻西上人出レ之

奢摩他行如象歩云〻

称讃浄土経現在前立云〻

法華云在二門外一立云〻

天台方便品疏云行動仏立像云〻

又常行三昧仏立二三昧名一事

迎〈浄土ノ始、恵心僧都以二春日部恒則一令レ画レ之云〻

のように幾つかの理由を列挙している。これらのうちから歩行姿の像に関連すると思われるのが、最初の、「奢摩他（しゃまた）」(śamatha　散乱した心を静め、ひとつの対象に向かう寂静の状態）の行は象の歩むが如しというくだりと、『天台方便品疏』（先に述べた『妙法蓮華経文句』）に書かれた、行動仏は立像たりという文言であろう。これらをことさら引用していることからすれば、来迎の阿弥陀像を立像とするだけでなく、さらに歩行の姿とすることも、瞻西以前から行われていたと推定される。もっともそれを裏付ける実作例に乏しいのは、単に遺品が少ないためか、あるいは実際にはあまりつくられなかったためか。少なくとも後白河法皇の往生を欣っての造立である本願寺像が、時代が少し下るものの、そのような趨勢を窺わせる一例であることは疑いない。

快慶が数多くつくった三尺阿弥陀像の中に片足踏出しの像が少なくない。法皇追善仏に見られるような前代までの情勢を踏まえて、積極的にこの像容を採り入れたのが彼だったともいえよう。

結び

後白河法皇の崩御は、建久三年（一一九二）三月十三日、六条西洞院の御所においてであった。『玉葉』には、「臨終正念、面向西方、手結定印、決定往生、更不疑、云々」とあるのに続いて「後聞、不向給西方、向巽方、云々」と註記されている。西方ではなく巽（南東）を向いたというのは不審だが、六条殿から見て巽方にある法住寺殿を臨んだということか。それはともかく、崩後、法皇の所領だった広大な長講堂領が皇女宣陽門院（母は丹後局）に譲られた。その中に丹後国久美庄が含まれている（『長講堂領目録』）。法皇の追善仏のひとつが、供養後、丹後久美浜の本願寺に移されたのも、そのような背景があってのことだろう。

この寺の沿革は、伝承では、天平二年（七三〇）行基の創建、寛弘元年（一〇〇四）頃源信の中興とあるが、もとより信を置くべき内容ではない。しかし建久三年頃に何らかの機運があったらしいことはいえる。というのも、天正九年（一五八一）因幡国本願寺（鳥取市）が、丹後久美浜の本願寺から阿弥陀像を迎えて開かれているのだが、

挿図８　阿弥陀如来像
本願寺（鳥取）

この像は中央作とはいい難いものの、十二世紀末頃の作風を示す来迎印の三尺（像高九七・〇㎝）立像という、丹後本願寺像と同形同大の像である（挿図8）。両像ほぼ同時期の製作という点からいえば、この頃の寺勢の昂まりを推定できる。法皇追善仏の施入がそのきっかけだったことは、当然想像されよう。

来迎印を結ぶ三尺阿弥陀立像は、天台浄土教という環境の中で成立し展開してきた。法皇追善仏とされる本像はその中に位置づけられるものだが、さらに覆肩衣を着さないことや、片足を少し踏み出すことなど、当時としては斬新な図像を採用している。鎌倉時代に至り、前者はあまり受け継がれることはなかったものの、後者は立像の来迎図や快慶の三尺立像と密接な関係をもつに至った。追善仏として三尺立像が供養されたという事実が知られることのほかに、後世広く行われた片足踏み出し像の起点に位置する本像の意義は、さらに大きいと考える。

〔法量（単位＝センチメートル）〕

像高	九七・九	髪際高	九〇・六
頂―顎	一七・七	面長	一〇・四
耳張	一三・七	面幅	一〇・八
面奥	一四・六	臂張	三三・一
裾張	二一・四	胸厚	一五・〇
腹厚	一八・三		

〈注〉

1 『鎌倉遺文』第二十七巻（二〇二八一号）に収められているが、その読みは本文中のそれと異なる箇所がある。

2 『円光大師御遺跡廿五ヶ所巡拝行程案内記』

3 〔後補〕肉髻上半、右手第四・五指、漆箔。

4 〔欠失〕肉髻珠。

5 『歴代残闕日記』巻三十一所収。なお『大日本史料』第四編之四にも翻刻されている。

6 この推定が当を得ているならば、四月十二日供養の「仏突立障子」に図された阿弥陀三尊とは、来迎形でしかも立像だったともいえよう。この文書の二行目に「親季」と読める人名がある（挿図9）。『心記』の追善供養者の中にこの名はないが、これを「親宗等」と読めば、親宗は四月廿四日に等身地蔵像等を供養した人物として出てくる。

挿図9　本願寺文書（部分）　本願寺

7 『真如堂縁起』によれば、円仁所造の阿弥陀立像は、その後、永観二年（九八四）に比叡山から下ろされ、雲母坂地蔵堂、白河女院の宮中などに移されたあと、正暦五年（九九四）、新しく建てられた真如堂の本尊として迎えられたという。

8 光森正士・岡田健『仏像彫刻の鑑賞基礎知識』（至文堂　平成五年）四十八頁

9　地蔵や一部の弥勒（菩薩）は、菩薩でありながら着衣は如来のそれに準じている。

10　立像で覆肩衣をしない阿弥陀像の例（平安―鎌倉時代）を次に挙げる。

三重　慈恩寺像（九世紀。ただし本来は別の尊像か）

福岡　観世音寺像（九―十世紀）

京都　知恩院像（十三世紀）

なお、立像来迎図の中でも古本とみられる清涼寺本、山口家本などの阿弥陀像も覆肩衣をしていない。

11　久野健「東アジアの仏像と偏衫」（『古代金銅仏』　小学館　昭和五十七年）

12　小杉一雄「行像―ベゼクリクの行像壁画―」（『仏教芸術』一九　昭和二十八年、『中国仏教美術史の研究』所収）

13　浜田隆「立像阿弥陀来迎図成立史考―仏坐像から仏立像へ―」（『仏教芸術』一二九　昭和五十四年）にこのことが指摘されている。

14　吉村稔子「清涼寺迎接曼荼羅と上品上生往生願」（『美術史』一二六　平成元年）

〔付記〕

本願寺の阿弥陀如来像と文書の調査に際しては、寺および京都府教育委員会技師石川登志雄氏の協力を得た。